

## 「距離」から震災を理解すること—あとがきにかえて

### ブックレット『東日本大震災をどう受け止めたか』刊行の経緯

このブックレット『東日本大震災をどう受け止めたか』は、早稲田大学オープン教育センター・テーマカレッジ「国際言語文化研究」の全体活動の一環として企画されたものである。このテーマカレッジは、「ことばと文化」や「異文化理解」などのテーマに関して、学際的な視点から探求することを目的としている。なぜこのテーマカレッジから「東日本大震災」をテーマに位置づけ、ブックレットを刊行することになったのか。いささか主観的な視点からの「あとがき」であるが、まず簡単に刊行の経緯を説明したい。

3月11日に東日本大震災が起こった。この震災による甚大な被害は、毎日のように報道がなされ、無数の関連図書が刊行されているので、あえてここで述べるまでもないであろう。首都圏においても、震災後しばらくの間、公共交通機関の運行が制限されたり、計画停電が実施されたりするなど、日常が一変した。それと同時に、この震災によってこれまでの生活のあり方を問い直す機運も生まれてきた。震災をどこで、どの立場から経験したかによって経験の内容に違いがあるだろうが、広範な地域に被害を及ぼした今回の震災は、特定の地域・立場の人々ではなく、あらゆる人々がこれからの生活、さらには社会の方向性を考える契機になったように思われる。

震災の影響によって、大学などの学校は授業開始を延期し、早稲田大学の授業も5月からのスタートとなった。震災から約2ヶ月が経ち、津波や原発の被害にあった地域では未だ復旧のめどが立っていない状況であったが、首都圏では震災前とほぼ変わらない生活が可能になっていた。実際に、私自身も身の回りの日常が回復していくにつれて、震災に関するリアリティも失いかけていたところであった。こうした危機感を覚える中で、震災後の社会の方向性を一人ひとりが持続的に考え、再構築していく上でも、何らかの形で震災の記憶をリアルな形で残しておくことが必要なのではないかと考えるに至った。

震災をどのように体験／理解したのか。震災の体験後、どのように行動したのか。これらの問いに対して、執筆者一人ひとりに「当事者」としての震災経験をことばにしてもらった。「ことばと文化」を扱うテーマカレッジとしては、この経験談を文集にまとめることで、少しでもこれまでの社会を問い直すと同時に、震災後の社会を構想する機運の持続に寄与できればと考えている。

体験談の収集にあたっては、テーマカレッジの教員や学生をはじめ、広く学内外の教職員、学

生、被災地でボランティアとして活動した市民の方に寄稿をお願いした。お陰様で多くの方にご協力を頂き、書評も含め 60 篇ほどの原稿が寄せられた。心より感謝申し上げたい。

なお、このブックレットの編集に関して、執筆者にありのままの経験や考えを執筆してもらい、寄稿原稿の内容を読んだ上で構成した。本ブックレットに原稿を寄せて下さった方は、立場も年齢もキャリアも様々である。たくさんの方の原稿をまとめるにあたり、例えば単純に学生と教員を分けて目次を立てることも考えたが、ここでは執筆者の立ち位置の共通性に注目して、章立てを行った。後述するように、執筆者のそれぞれの立ち位置が震災経験の語りのあり方を特徴づけているように読めたのである。

### ブックレット編集を通じて感じたこと

2012 年の正月に、私の出身地・福島県に暮らす中学校時代の同級生から年賀状が届いた。そこには、友人夫婦と 2 歳になる子どもの写真とともに、手書きで「昨年は命の大切さを実感した 1 年でした」と書かれてあった。友人に命の大切さを実感させたのは、言うまでもなく 3 月 11 日に東日本大震災である。それは何気ない一言であったが、私は「命の大切さ」という言葉を読んで、自分と友人とのリアリティの「距離」を感じざるを得なかった。この「距離」の感情は何に由来するのだろうか。

震災以後、いたるところで「絆の大切さ」という言葉を耳にする。その言葉が 2011 年を代表する漢字にもなったのも記憶に新しい。私もそうした言葉を一定のリアリティをもって授業などで学生に伝えることもあった。だが、私にとって、友人の「命の大切さ」という言葉は重すぎたし、うまく受け止めることができなかった。私は震災について「絆」を語ることもできても、実感を含めて「命」の大切さを理解し、語りうる場に位置していないことに気付かされた。東京で被災した私と、震源地に近い福島で地震を経験し、さらに原発事故によって放射能が広がる中で身の危険さえも想像したであろう友人とは、経験の質において異なっていたのである。

おそらくこうした経験、場所、生活などの違いに、私が感じた「距離」は由来するのかもしれない。この「距離」がそう簡単に縮まるかどうかはわからないが、いずれ地元に戻省した際に、この友人に当時の経験を聞いてみたいと考えている。

今回のブックレットの編集にも、個々の語りの背景にある共通の問題意識を見出せたが、一方でそれぞれの経験の語りや考え方の間には、一定の「距離」を読み取ることができた。執筆者（あるいは執筆者にとって大切な人）が被災地の中心よりいたか／周辺にいたか、あるいはどのような立場から語られているのかによって、語られることばが多様に表れていた。震災に対す

る考え方が、抽象的なものではなく、執筆者それぞれのリアリティの中で息づいているように思えたのである。

## おわりに

震災以降、「がんばろう日本」や「絆」といったポジティブな意味を備え、非常に明快なことばがメディアを通じて社会に溢れるようになった。当然ながら、こうしたことばは、立場を超えて、多くの人々が当事者として震災からの復興に関わる動機を提供したという意味で意義深いと言える。しかし、抽象的なことばは、一方で個人々の具体的な経験を見えにくくするだろうし、あるいは特定の表現や立場が人々の考えや振る舞いを規定するとき、このような経験の差異が分断として表出してしまうかもしれない。

このブックレットは、あくまで執筆者の方々にはありのままの経験や考えを書いてもらい、ほとんど編集の手を加えずに、内容をそのまま載せるという方針をとった。そうすることで、震災の経験や捉え方の多様性や生々しさを示すとともに、震災を思考するための材料を読者に提供できるのではないかと考えたからである。このような特徴を備えた本ブックレットが、広く読者が震災後の社会のあり方を構想する起点の1つとしての役割を担えればと強く願っている。

末筆ながら、このブックレットの刊行にあたり、早稲田大学オープン教育センター・テーマカレッジ「国際言語文化研究」のご担当の先生方、および同大学国際言語文化研究所のスタッフよりご協力を頂いた。心よりお礼を申し上げます。

2012年2月22日

佐川 佳之